

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

坂井博通著

## 『少子化への道：子供統計ウォッチング』

学文社, 1998年刊, pp.158

本書は、著者が『季刊 子ども学』をはじめとする雑誌に掲載した少子化時代の子ども現状を分析した論文を集めたもので(第4章を除く)、「少子化への道」「子どものジェンダー」「子どもの現代的特徴」「子ども統計の見方と盲点」の4部からなる。以下に各章の内容を簡単に紹介する。

＜第1部＞第1章「少子社会にいたるまで」では、少子社会、少子化社会の定義からはじまり、少子化が家族関係に及ぼす影響などについて触れ、第2章「大人が見えなくなった子どもたち」では、子どもが両親と住んでいる割合や母親が就労している割合を示し、そこから子供の側から見た家族像を捉えている。第3章「出生動向の地域差の変貌」では、日本全体の動向と地域(都道府県)別にみた時の動向は同じでないことを1947から1994年までのいくつかの出生動向データを分析して示している。第4章「子供をめぐる言葉の意味の変化」では、家族、出産、子、発達、親、結婚に関する言葉の定義を広辞苑の4版(1995)と初版(1955)で比べている。

＜第2部＞第5章「ジェンダー的人口問題」では女兒選好、幼稚園の女兒化、保育園の男児化の現象をデータで示している。第6章「「子」がつく名前の女の子は頭がいい」では、出生年別の名前ベスト10の解釈に加え、「子」がつく名前の女の子は親が保守的であるため、結婚が早い、きょうだい数が多い、といった仮説を短大の卒業名簿や学生アンケートの分析を通して確かめている。

＜第3部＞第7章「日曜はだめよ、または、出産時コントロール」では、親と医師側の希望やコントロールが出生年月日に色濃く反映されていることをデータで示している。第8章「地域差と性差がある幼稚園・保育園教育」では、地域によって保育園と幼稚園の在園率が違うことやそれらと女親が働くこととの関連などをみている。第9章「「子」メディアンの特徴」では、年齢、性別、友人関係とメディアの好みとの関連、メディアの影響とその受け止め方の調査結果を示し、メディアの影響には良いものも悪いものもある、と述べている。第10章「都市化は進むよどこまでも」では、若者の消費文化について述べ、都道府県別のファミリーレストラン、コンビニなどの数を調べ、若者の消費行動や消費実態にも地域差があることを示している。第11章「10代の結婚、出産、中絶」では、ロマンティッククラブの普遍化に伴い、10代については、一般的傾向とは反対に、中絶、出産や男子の結婚が増加していることを示している。

＜第4部＞第12章から17章では、それぞれ「数と割合と率」「全体と部分」「事実と解釈」「母集団とサンプル」「年齢と世代」「世論統計とパラダイム」について、「～のあやしい関係」と題して、子どもに関する統計の例を用いて、統計の見方と盲点をわかりやすく説明している。これらの章は統計を見る側に注意を促しているものであるが、統計を出す側も、見る人を「だますことのないように」わかりやすく表現していくことを心掛けなければならないことを痛感させられた。

本書は、ひとつの理論を順に展開していく類のものではなく、少子化時代の子どもをめぐる数々の現象に言及しているもので、とにかく内容が豊富である。複雑な事柄についても、日常の言葉をユーモアでつなぎ合わせながら説明されているので、楽しく学びながら読むことができた。ここで触れられている事項のそれぞれが大きな研究テーマと成り得るため、興味をもった分野に深く入っていく動機づけにもなる本である。したがって、「子ども」に関心をもつ研究者のみでなく、著者自身も望まれているとおり、大学のサブテキストとしても適切な著書である。(釜野さおり)